

下関短期大学開学 60 周年記念展示 『しもたんの追想と予想』報告

塩田博子・山本正俊・金銀英・水津玉美・福原みゆき

Report on the “Memory and Expectations of Shimotan”
the 60th Anniversary exhibition of Shimonoseki Junior College
by
Hiroko Shiota, Masatoshi Yamamoto, Kim Eunyoung, Tamami Suizu and
Miyuki Fukuhara

要旨

本稿は下関短期大学開学 60 周年記念展示『しもたんの追想と予想』の展示開催までの報告である。

『しもたんの追想と予想』は、開学 60 周年を記念し栄養健康学科、保育学科、一般教育、図書館が協力し開いた令和 4 年度の山口県 ML 連携特別展である。栄養健康学科はオリジナルレシピを展示し、保育学科は手作りおもちゃと壁面構成を展示、一般教育は初代学長河野タカのゆかりの品と 60 年の歴史を振り返るビデオ上映、開学 60 周年記念講演会の要約をパネル展示した。

今回の展示は本学 60 年の歩みを振り返るよい機会になっただけでなく、全学科と図書館が協力のもと、取り組んだ初めての展示であったことに意義がある。

1 はじめに 本展示の趣旨（展示起案者：金銀英）

令和 4 年（2022）は下関短期大学が開学 60 周年を迎える年である。それを記念し学内では講演会をはじめとする記念行事が計画された。図書館では両学科と力を合わせ、記念展示会を企画していた。展示会に向け学科と図書館が協議を交わすさなか、令和 4 年度山口県大学 ML 連携特別展のテーマが「追想」になったとの知らせが届いた。本学は平成 25 年から山口県大学 ML 連携事業に参加しており、テーマが記念展示に相応しいことから ML 連携特別展をもって記念展示会を開くことにした。

山口県大学 ML 連携特別展とは山口県大学 ML 連携事業の一つである。平成 25 年に県内の 9 大学 12 の図書館と博物館が始めた山口県大学 ML 連携事業は、一定期間共通したテーマで学術資料や研究成果を展示している。

下関短期大学は『しもたんの追想と予想』を題に決めた。「しもたん」とは下関短期大学の愛称である。展示会開催に向けての話し合いで、両学科と一般教育の三つのパートに分かれそれぞれの立場から60年を振り返りこれからの目標を展示することに決まった。各パートでさらに話し合いを深め、最終的に栄養健康学科は平成22年から続けているオリジナルレシピを、保育学科は長年続けている手作りおもちゃ制作を、一般教育では60年の歩みと記念講演を題材に展示をすることとした。会場は図書館ロビーにし、図1のように配置を決めた。

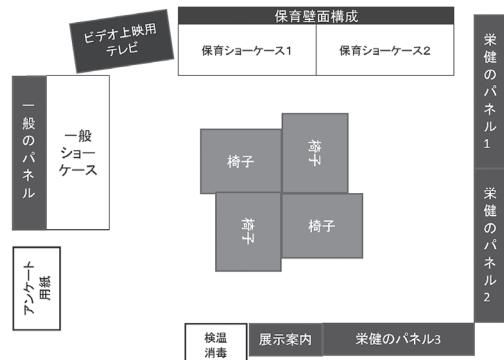


図1 展示配置

本稿は開学60周年記念展示『しもたんの追想と予想』の展示への思いと開催までの報告である。

2 栄養健康学科 オリジナルレシピグランプリ

本章では栄養健康学科の展示への思いと展示の様子について報告する。

2・1 オリジナルレシピ 始まりと変遷 これからの展望（栄養健康学科学科長：塩田博子）

年々家庭での食生活が、欧米化とともに、加工食品や外食・中食が多くなり、健全な食生活の乱れが我が国の生活を震撼させて来るようになってきた。そこで、平成18年度には内閣府による食育基本法が施行されて、食育基本計画が立ち上げられて、全国的に食育活動が行われるようになった。その後、農林水産省が中心となり、文部科学省等の参入により、食育活動が地域や各教育施設、児童福祉施設などで実施されるようになった。

その中で、本学学生も食育に関する教育を受けるとともに、本学科は栄養士養成施設であるので、卒業後、栄養士として社会貢献を担った職業に就くこととなる。この学生が、食生活の改善の第一歩として貢献するには、「しっかりとした栄養の知識のある」、「おいしい料理のできる」、「人にやさしい」栄養士の要請が必要である。そこで、平成22年度入学生より、栄養士養成の専門教科の基礎である調理学と調理学実習Ⅰの教科を基に、レシピの作成に力を入れ、自信をもって皆さんに紹介ができる、第一歩として「私たちの献立」を1年生の夏季長期休暇（夏休み）に後期の調理学実習Ⅱとのかかわりとして課題を出し、平成24年からは、「オリジナルレシピグランプリ」と名称を変更し、学生の意識の向上を持たせるような内容とした。

筆者は平成17年度より調理学及び調理学実習を担当している。その頃は、入学してからも家庭での料理づくりに時間を取り、自分のレシピに自信のある学生が多くいるように感じられ、授業もガイドラインに沿ったシラバス内容をスムーズに行うことができていた。また、多くのレシピや献立、調味料についても関心が高いように思われた。

そこで、学生たちの関心を、栄養士として献立やレシピを作品として表現してはどうかと思い、平成22年度の夏休みより、1年生の学生に調理学実習担当者として「みんなの献立」と題した「主食」「主菜」「副菜」「汁物」「デザート」の5種のコーナーに分類したものについてレシピ作成を夏休みの課題とし、後期開始時に提出を行うこととした。夏休みに真剣に取り組み、試作を重ね、提出をする学生が多く見られた。その後、夏休みの課題として「主食」「主菜」「副菜」「汁物」「デザート」を各2品、提出することとした。

また、平成24年度からは、せっかく作った献立を、提出、評価のみでは力の発揮に不足と感じ、多くの方々にも紹介したいとの思いで、学生とも話し合いタイトルを「オリジナルレシピグランプリ」と学生が提案し、この年より、毎年「桜山祭」で展示することとした。

これには、展示だけではなく、学生や教員、保護者や来学者、同日開催されるオープンキャンパス参加者にも「主食」「主菜」「副菜」「汁物」「デザート」の各コーナーに、「おいしそうだ」、「作ってみたい」等興味のあるレシピに、各コーナーに各1ポイントの投票をお願いした。後期終了時には、各コーナーの得点を発表し、優秀賞及び総合優勝についての表彰を行っている。

令和3年度より大学祭の中止や縮小により、本学付属高校のある本館の事務局前に掲示し、付属高校の教職員、生徒の方々にも紹介及び投票にも協力を依頼している。

レシピの作成は、今年度で13年目を迎えたが、開始当初からすると、学生の傾向としても、国内での食育が必要な現状と同様、実習中の会話でも「家庭での調理をあまりしない」、「調理にあまり関心がない」、「さ・し・す・せ・そ、の基本調味料ではなく、料理に適応した調味料を使用する」、「加工食品の使用」等、時間や手間の省略された調理や中食などが多く占めるような意見がみられ、調理への関心度が年々低下してきているように感じられる。

これらのことから、ここ数年は「オリジナルレシピコンテスト」の課題にも、影響が生じ、内容や調味料の使用方法等に問題も出てきているのが現状である。筆者も、将来は栄養士として活躍していく学生に「食べることの大切さ」、「調理することの大切さ」、「おいしく食べることの大切さ」等「調理の科学」、や「調味料の基本」等についても教育、指導を重ねていくことが大切である。実際の展示や、コンテストは、学生の意識の向上につながっていくが、表現方法としては、デジタル化の中で、電子機器を使用し、多くのレシピを考えられるようになり、対象者に応じた献立作成ができるようになることを望んでいる。

そして栄養士養成施設としての本学の教育目標である「しっかりとした栄養面の知識を兼ね

備えた」、「美味しい料理のできる技術を兼ね備えた」そして「人にやさしい」栄養士として、地域に貢献出来るように指導していきたい。

ML連携としての展示は、短期大学開学60周年の紹介として毎年の展示方法とは違い、令和3年度までの12年間の各コーナーの優秀なレシピや優秀賞のレシピを約60点紹介した。60年の歩みの中での僅か5分の1の年数の活動となるが、卒業前に本人に見せると、こんなレシピを作って発表したことを恥ずかしい、もう少し考えられなかったのか等口々に言っているが、1年半でこれだけの成長が見えてくる。学生の献立作成の第一歩の個人の作業として、これからも継続していきたい。

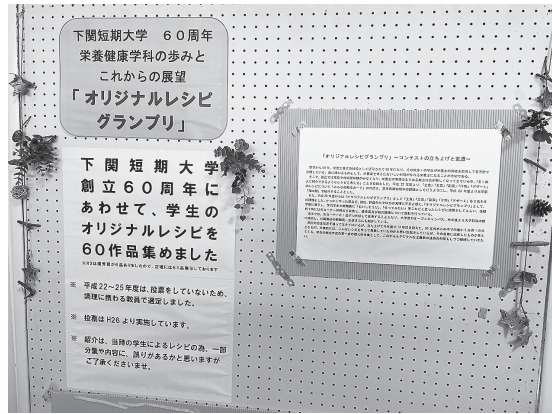


図2 栄養健康学科展示1

2・2 展示の方法について（展示担当教員：福原みゆき）

展示の時期が秋・冬ということで暖色系の紙や毛糸といった素材を使用し、あるいは本学の立地場所が「桜山」であることから桜や自然素材を使用して、季節や本学を表現した展示となるように構想した。

学生が作成したレシピはA4タテであるが、展示のスペースが限られているので、A5サイズに縮小し、個人情報となる学籍番号と氏名は切り取った。さらに、献立の種類が一目でわかるように20cm×15cmに切った画用紙を台紙として色分けをした。

台紙の色分けは、主食は黄色、主菜は緑色、副菜は黄緑色、汁物は青色、デザートは橙色



図3 栄養健康学科展示2

とし、ラベルライターを使用して「〇年度 優秀賞」の印字ラベルを作成し、全部の台紙に貼りつけた。それらを桜色の110cm×80cmの模造紙に種類別に計5枚に貼り、水玉模様のマスキングテープで白色毛糸と麻紐でレシピを囲うように格子状に貼った。それぞれの模造紙の上部には、5cm×10cmのボール紙に「主食」「主菜」「副菜」「汁物」「デザート」と印字した用紙を貼り付けた。また、来

場者の目を引くために、模造紙の周囲に植物モチーフのマスキングテープを貼り、ところどころに古いカレンダーより切り取ったレースや花、雪の結晶などのモチーフを貼ったり、模造紙と毛糸・麻紐の間に造花を挟んだりして華やかさを加えた。

展示パネルは180cm × 120cm のものを4枚使用した。そのうち1枚は栄養健康学科展示のテーマである『栄養健康学科の歩みとこれからの展望』についてのタイトルがA3ヨコ1枚、展示についての説明文がA3ヨコ2枚、オリジナルレシピグランプリについての説明文A3ヨコを37cm × 51cm のピンク色の波段ボールに貼り付けたもの1枚と、同じ波段ボールを74cm × 107cm に切ったものに実物大の料理カードを15点貼り付けたもの1枚の計5枚を展示した。

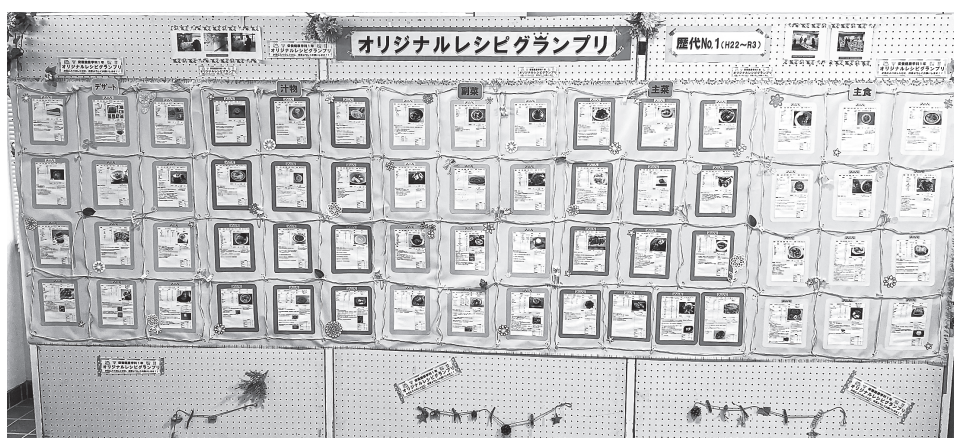


図4 栄養健康学科展示3

残りの3枚の展示パネルは横に連結し、レシピが貼ってある模造紙を繋げて貼り付けた。展示パネルの上部スペースには「オリジナルレシピグランプリ」と印字した用紙を赤色の画用紙に、「歴代 No.1 (H22～R3)」と印字した用紙は黄緑色の画用紙に貼ったもの、平成27年、平成30年、令和3年に開催した際の写真計5点を展示した。なお、オリジナルレシピグランプリの名称および「ラ」の画目が王冠になっているのは、平成26年に開催した際の学生のアイデアで、それを現在まで引き継いでいる。

展示パネルの空きスペースには、グランプリで実際に使用しているデザインの横断幕を縮小印刷したものや、本学の桜の枝などを使用して作成したオーナメント、造花やガーランドで装飾した。

3 保育学科 Shimotan60 と手作りおもちゃ

本章では保育学科が目指す方向性と展示の様子について述べる。

3・1 これからの保育（保育学科学科長：山本正俊）

本学は1962年に下関女子短期大学として創設され、2022年に60周年を迎えた。

本学は一貫して、「人としての温かさや優しさを備え、礼儀と節度をもって自らの心を磨く」という「温雅而尚礼節」を教育理念に掲げ、地域社会で活躍する多くの人材を輩出してきた。今後も建学の教育理念を守り、「温雅、礼節」の訓を具現できる豊かな人間性を育む大学でありたい。そのために、現在の課題について検討することから、今後の保育学科の方向性を探っていきたい。

相変わらず少子化傾向が続くなか、大学の数は減少とはなっておらず増え続けている。一部の大学においては入学のハードルは高いものの、それ以外の多くの大学では「定員割れ」を起こし、今後もさらに厳しい環境になることが予想される。その結果、学生数を確保するために入学試験の方法も多様化し、学力試験を実施せず高大連携入試や指定校入試制度を導入している大学も増えてきており、このことが「学力不足」の一因となっているとも言える。

本学においても目的意識が薄い一部の学生が見受けられる。保育者として預かる乳幼児・園児の生命を保護しながらその発達を援助・支援するという保育の根本を理解しないまま「保育＝子どもと遊ぶ」「保育職＝子どもが好きであれば勤まる」のような認識で入学する学生がいる。さらには、入学後も保育者をめざすことが「夢」や「あこがれ」のようなレベルで考えている姿を学生生活の中から感じることがある。このような学生に保育とは何か？保育者には何が求められ、2年間でどのような学習をして何を身につけていかなければならないか？を認識させ、将来の保育者としての自覚や責任感を育てていかなければならない。

また、保育をめぐる環境の変化も著しい。子育て環境が変化するにつれて保育現場で求められる支援も多様化している。障害のある子どもや気になる子どもへの支援、また家庭教育に困難さのある子どもへの支援、さらに保護者への支援など、多岐にわたって対応することが求められるようになっている。

こうしたなか、保育者が関わる業務に目を向けると、ただ子どもの保育に携わるだけでは役割を果たすことができないことが分かる。ここで、本学科として、どのような人材を育てていくのかが、今後の大きな基本方針となってくる。「人材育成」というのは簡単なことではない。時間をかけて人材を育てていくことは、保育の現場に限ったことではない。時間をかけて経験のある先輩が後輩を育てる。自ら、OJTやOFF-JTに進んで取り組んでいかなければならない。本学ではこれらをキャリア教育や保育者論の講義で詳細に教えている。教育公務員特例法の「研修」及び「研修の機会」にもあるように、保育者になった後こそ、自ら進んで励まなければならない。また、学科として取り組む基本方針として掲げた「人材育成」であるが、これを下支えするのが、大学での専門的知識・技能であり、これが実を結ぶためには「人間性・人間力」が備わっていなければ、育成には程遠くなってしまう。

視点を変え、卒業生が勤めることになる事業所の視点からこれからの保育を考えたい。

毎年卒業生が保育者として活躍しているが、その事業所からの聞き取り調査では必ず次の3点が多数を占める意見としてあがっている。1点目は専門的知識・技能、2点目はコミュニケーション能力・挨拶等の礼儀、3点目は日本語力の問題である。

2点目の問題については個人の人間性からくる要素が大きいと考える。そして、事業所はこの人間性にあたる部分を大学では教えているのか、教えてほしいという嘆願のような意見がある。3点目の日本語力の問題は、誤字や当て字が多い、主語と述語の正しい呼応ができない、助詞の不適切な使い方等、これから保育者として備えるべき資質の一つに欠ける指摘を受けている。

しかしながら、学生自身は自分の人間性や文章力等について疑問を抱いていない。さらには話がしっかりと聞けない・聞かない学生が増えている悲しい現実がある。「子どものお手本になる」、「せんせい」と呼ばれる立場になるという自覚が持てるような指導を続けることで、礼節をわきまえた態度で授業に臨むことを期待したい。このような状況を踏まえて、社会人として持つべき良識と基礎知識を大学全体で繰り返し教えていかなければ保育者としての業務遂行に支障を来し、卒業してからも苦労を重ねることになる。

以上の3点の指摘は実は「学外実習指導（教育実習・保育実習・施設実習）と直結する喫緊の課題」への提言でもある。学外実習は、保育現場から学生の実践力が評価されるとともに、保育学科の教育力も評価されているといってもよい。学生は、準備段階から保育者になる機会を与えられた実習であることの意味を念頭に置き実習に臨んでほしい。実習から上記の3つの力が試されるのである。

これらのことから分かるように、保育者としての力量は専門的知識・技能はもちろんであるが、こうした基礎・基本的なことに踏み込んだ教育を一層強化して取り組むことが求められる。保育学科は、半世紀以上にわたり多くの保育者を輩出している伝統がある。この伝統を守りながら、まさに現在の学生気質に合った保育学科を目指すためには、上記の問題に取り組むつつ、学園全体の理解と支援が必要であると考えられる。

3・2 展示の方法について（展示担当教員：水津玉美）

礼法を基調とする人間づくり、協調と信頼に基づくふれあいを通じて自由と責任への認識を深め、人を思いやる心、自らを律する心を磨くとともに、社会に適應する深い知識や高い技能の修得を目指し、「温雅、礼節」の訓を具現できる豊かな人間性を育むこと。

これは初代学長である河野タカ先生の教えであり、大正、昭和、平成、令和の時代と長きに

受け継がれてきた本学の理念である。タカ先生のお言葉を読み返せば読み返すほど時代を超えて現代に通ずる教えの一つ一つに深い意味があることが伝わってくる。タカ先生が今の時代にご健在ならば、近年のライフスタイルや働き方の多様さや本学の学生の日常を眺め、更に今の時代にあった教えをアップデートして説いていくのではないだろうか、と考える。

タカ先生の教えを基として本学で保育を教える立場である私は、保育の専門知識や技術の習得と同時に、本学2年間での経験と学びの中で「協調と信頼に基づくふれあい」や「温雅・礼節」を通じて人に良い影響を与え、人からも良い影響を受けながら「互いに存在価値を認めあえる人」の育成を目指していくことを目標としている。単に保育士養成校としての下関短期大学ではなく学生への熱い思いを持った教員が揃っている本学の「今」こそ、目指すものであることにちがいない。分断孤立が進む世の中でもタカ先生の温雅礼節の精神は、時代を超えてアップデートしながらもこれからも後世まで引き継がれていくものであってほしい。現在にタカ先生がご健在ならば、このように思われているのではないかと60周年を迎えた今に思う。

今回の、『しもたんの追想と予想』では保育学科1年生が「乳児保育」の夏季課題として乳幼児の手作り玩具を展示した。現在は物や情報が溢れ、ネットからの完成イメージが情報として出てくるので学生にとってはイメージしやすい上に100均で様々な良質な材料が手に入る為、クオリティーの高い物が制作できている。乳児の保育を行う上では手作りの温かみを忘れないでほしいと思う。今回、展示することで手作りの良さをあらためて実感できるよい機会になった。



図5 保育学科展示

さらに学科の過去と未来を保育学科らしく表すために壁面構成を作成した。左側は過去を表す面として、創作発表会やレクリエーション講習、図画工作の授業など保育学科の様々な授業で取った過去写真をフィルムのネガに見立てて表現した。右側は未来を表す面にした。シャボン玉遊びをする子どもたちを色紙や色鉛筆で描き、そのシャボン玉に保育学科学生が思い描く未来や保育者像を書き込む形式にした。

教員製作ではあるが、過去と現在の保育学科の様子を表すドールハウスも展示品に加えた。制服姿の短大生が学校生活を送る様子と、平成・令和の学校生活の様子をドールハウスにし、それらを対比する形にした。

4 一般教育 60年の足跡とこれからの短大（展示担当：金銀英）

本学は栄養健康学科と保育学科を柱に社会で活躍できる人材を送り出すことを目標に学生指導を行なっている。両学科では学生たちが在学の2年間で目標にした資格を取得し即戦力として地域社会で活躍できるよう指導しているが、さらに一社会人としての素養は一般教育で身に付くようにしている。

本学の一般教育は国語や英語の言語をはじめ、社会人としての将来設計ができるよう多方面からの指導をするキャリア教育、心身を鍛錬するスポーツなど様々な講義・演習を通してその責務を果たしている。また、時代の変化と共に変化する社会、変化する学生に適した一般教育のあり方を見直し続ける努力も怠っておらず適宜にカリキュラムを改変している。

このような一般教育の性格から、栄養健康学科・保育学科の両学科のように教育的成果を示すことが難しく、この度の展示では全学としての下関短期大学を表すことを目標にした。展示タイトル『しもたんの追想と予想』に合わせて過去を振り返る展示と、これから下関短大が目指す教育を示す展示の二つに分けることにした。

60年の歳月を視覚的に表すために象徴性を持つ初代学長河野タカゆかりの品と時間の経過を表せる卒業アルバムを素材に決めた。

ゆかりの品は河野タカが教育に尽力したことが認められ受勲した勲章と銀杯を展示することにした。卒業アルバムはその量も多く、全てを展示することは不可能だったため、一部を展示、残りは写真をスライドショーにしビデオ上映にした。



図6 一般教育展示1



図7 一般教育展示2

未来の展望は令和4年9月1日に行われた記念講演会の内容を要約し、パネル展示した。

阿山光利氏を講師に迎え付属高校と短大の教職員が参加した講演会ではこれからの短大教育と高大連携までもを包括する内容だったが、この度の展示では短大教育の部分を取り取ってまとめた。

学生の為には河野タカの教育理念の一つであった人格形成のための教養教育

を、地域の為には専門知識を備えた優秀な人材を育成することが短大の元来の目的であり目指す道であること、そのためにはきめ細やかなキャリア教育と能動的で自立した教養教育が求められるとの内容になった。



図8 保育学科の展示と一般教育のビデオ上映の様子

5 展示概要

下関短期大学の山口県大学 ML 連携特別展は令和4年11月7日から令和5年1月31日まで開かれる。学外からの観覧希望者は新型コロナウイルス感染状況に対応するため事前に連絡をもらうようにしたが、学内の観覧者は自由に見られるようにした。^{注1)}

本稿は展示期間中に執筆しているため、展示の成果まで検討することはできない。ただ会期中の現在でも分かっている反省点がある。

下関短期大学図書館は平成25年から山口県大学 ML 連携特別展に参加しているが、毎回観覧人数の把握ができないという問題点を抱えている。図書館の構造上、観覧人数の

把握が難しいことと、展示案内に割ける人員がいないためである。関連してアンケート回収の難しさも長年の悩みである。連携事業事務局が用意した共通アンケートを置き、特別展示記念品を進呈することを貼り紙で案内し記入を促すが今年も回収が振わない状況である。その中、



図9 山口県大学 ML 連携事業 HP の紹介ページ

教員や図書館職員が耳にした観覧者の声は次のようなものがあった。

- ・新しい発見があった
- ・懐かしい
- ・栄養健康学科が何を勉強しているのか分かった（保育学科学生）
- ・保育学科のおもちゃかわいい（栄養健康学科学生）
- ・レシピ作ってみたい
- ・〇〇先生、若っ！

開学60周年の記念展示会『しもたんの追想と予想』の準備を通して、初代学長河野タカの教えと変わりゆく社会に適応できる確かな人材を育成する使命を再度確かめることができた。各学科と図書館が協力し準備した展示会はそれまでの道のりは大変だったが、学生たちに古いことへの発見と、両学科が互いの学修内容・活動について理解を深めるいい機会となり、その手ごたえを感じている。

参考資料

- (1) 山口県大学 ML 連携事業「展示」：<http://www.oai.yamaguchi-u.ac.jp/ml/exhibition/2022/>